

現地視察で思うこと

政治経済評論家 李 健

言うまでもなく、日韓トンネルということになれば、入口が日本であれば出口は韓国ということになる。逆に、韓国を入口とすれば、出口は日本である。つまり、日本も韓国も、同じ当事国なのである。

先だって私が所属する第1部会の現地視察旅行に参加する機会に恵まれた。参加者は、松下正寿、景山哲夫、鳥羽欽一郎、それに途中から中川学の諸先生方、5日間の行程を楽しく過ごさせていただいた。

曇天に遮られて実際に見ることはできなかったものの、対馬から韓国の地を望見したときの感慨あるいは、名護屋城趾に立って歴史を想う、複雑、奇妙な心境など、到るところ印象鮮烈な旅であった。

帰途、国際ハイウェイ事業団の唐津現地事務所に立ち寄った。

私ばかりでなく他の先生方も同様のようであったが、実のところ、事業がきわめて具体的に、それも予想外のピッチで進歩しているのには驚かされた。

予想外、というのはほかでもない。ご承知のとおり、日韓トンネル研究会が正式に発足してからまだ日が浅い。それに、研究会ということである。これからぼちぼちはじめればいい、私自身そう思い込んでしまっていた。

ことに、第1部会というのは、経済・法律、理念、文化、政策などの研究に従事することになっている。きわめて包括的な、大きな研究対策である。それに、ちょっと考えただけでも問題山積である。

それだけに、腕組みをして、さて、どこからどう手をつけようというのが、ほんとうのところだったのである。

唐津では、事業団の船が音波探査とかいろいろな最新技術を駆使して、海中・海底調査を進めているところも見学した。

夕食時には、第2部会の方々と合流した。部会



唐津事務所にて 筆者後列左から2人目

長は日韓トンネル研究会々長の佐々保雄先生である。第2部会は、地形、地質、水理などの調査研究を受け持っておいでだが、ここでも私は驚かされた。話の端々から、ここでも、研究がきわめて具体的、かつハイ・ピッチに進歩していることがうかがい知れたからである。

うかうかしてはいられないぞ、というのが、驚きが導いた一つの思いであった。前記のように、問題山積という状況は、はじめから予想されたところである。本腰を据えてかからねばならない……。

驚きは、同時に、もう一つの思いをも強く私に抱かせた。

それはとりもなおさず、冒頭に書いたそのこと、このプロジェクトの当事国は2国であり、その一つこそ、まさに韓国だという事実を、あらためて、強く想起せざるをえなかったのである。

もともと、私がこのプロジェクトに参画し、理事をお引き受けして以来、私に課せられた責務は、韓国人がこのプロジェクトをどう受けとめ、日本側の働きかけにどう対応するであろうかなどを、正確に日本側に伝えることであろうと思い定めてきた。それが、韓国人として唯一人私を加えてくださった方々の期待であるにちがいないと思ってきた。

そしてこのことは、おそらくほとんどの方々、このプロジェクト実現のための最大の難問として、韓国側の対応、日韓関係の現実を考えておいでのこと、そして事実、このことこそ、確実に最大の難問であるという私の認識にも立脚するものであった。

あらためて書くまでもなく、韓国と日本の間に

はきわめて不幸な歴史がある。歴史を全体としてみれば、両国関係は総体的にはむしろ良好であった。だがいま、両国民の意識を規定しているのは近代に入ってからの、その不幸な歴史の鮮烈な印象にはかならない。

日本人の対韓認識の一般的状況がそうである以上に、韓国人の日本観は屈折している。被支配の歴史を通じての、反撓と抵抗に充ちている。

韓国民の誰もが、頭では隣国、日本との友好善隣関係を、あるべき姿として思い描いている。ことにこの数年来のすべての側面における韓国社会の成熟と、そのもとにおける国民意識の変革は、韓国民の対日意識をも大きく変えた。88年のソウル・オリンピックをその一つの成果とする国際化時代の到来は、かつてはそれ一色であった抵抗ナショナリズムの変容として、よりグローバルな視点からの日本観を定着させつつある。

だが一方では、どこかに、いまだひっかかるものが残る。

そんなところへの日韓トンネル問題である。どのような反応が惹起されるであろうか。いずれにせよ、問題山積であることに疑いはない。

しかし依然として、日韓トンネルの一方の当事国が韓国であることは、敵然たる事実である。日韓トンネルの実現のためには、両者が歩調を合わせねばならない。

日本側の事業の進捗状況は、できるだけ早い時期から、双方の当事業が緊密に連携すべきことを、あらためて私に痛感させるものであった。

日韓トンネルと地質構造

東京大学名誉教授 木村 敏雄

第四紀に日本列島が韓半島に、ひいては大陸に接続していた頃、ナウマン象などの哺乳動物が対馬のあたりを渡って渡ってきたことがよく知られている。その後、海水面が上昇したので、そこは対馬海峡の海となってしまったのである。

しかし、ナウマン象渡来以前に、韓半島と日本列島とがずっと陸地としてつながり合っていたわけではない。四億年近い日本列島の歴史の中で、陸続きになったり、海峡に切り離されるといった事件を繰り返している。

ナウマン象が渡来する前に、北九州が韓半島と陸続きであったのは、1億2000万年くらい前から5000万年くらい前までの長い期間であった。その時、両側の地域には同じ種類の淡水貝が住んでいたし、地質も似かよっていた。

そのあと、韓半島南部と北部九州との間に大きな裂け目が大断層としてできた。そして日本列島は韓半島から離れて南に大きく移動した。その大断層の主なもの是对馬の西側にできたらしいが、日本列島が移動したために凹みができ、対馬両側の海峡の原型ができた。そして北部九州の炭田地帯の炭層ができた時代のあとで(約2300万年前)、九州の北側から山口県の西北部にかけての地域に、東シナ海から東北に向かって日本海に向う海峡の海ができています。

次の時代には(約1500万年前)、五島から佐保の北あたりまでを含む大きな淡水湖を内側にもつ陸地ができたが、その陸地は九州本島、壱岐、



千俣蒔山から見た対馬の山々